

【会長就任講演】

日英語比較統辞論とパラメータの理論

—Fukui と Kuroda のシステムの相違点と類似点について—

福井直樹

上智大学

【要旨】 生成文法における多様性の研究は、普遍文法 (UG) の提案およびその探究と表裏一体の関係にある。UG の存在を想定するからこそ、なぜ人間言語は「多様性」を示すのか、その制約はどのようなものなのか、などが理論的説明を要求する問題として提起される。「理論的説明」とは、可能なかぎり少数の理論的想定からできるだけ多くの種類の言語現象を導く試みであるが、日英語統辞法の相違に関してこのことを試みた最初期の研究として Fukui (1986 等) と Kuroda (1988) を取り上げ、標準的理解とは異なり、この2つのアプローチには根本的相違点が存在し、またこれらに共通の重要な類似点は、単一のパラメータから多くの統辞特性を導く「クラスター効果」を得ようとしている点にあることを指摘する。このように理解して初めて、「パラメータ」概念の本質に関するその後の理論的発展、そして最近の生成文法研究とこれらの研究が適切に接続されることを示す*。

キーワード: 比較統辞論, パラメータ, X一致, クラスター効果, 機能範疇

1. はじめに

1950年代に本格的に開始された「生成文法の企て」(The Generative Enterprise) においては、人間という種に固有でかつ種内で均一に共有されている言語機能に関する理論である普遍文法 (Universal Grammar, UG) の本質の追究と共に、表面上およびただしい変異を示す諸言語の多様性の根拠を問い、その性格を規定することも重要な研究課題として設定された。本論考では、UGの理論を展開することと並行して行なわれてきた、生成文法における言語の多様性 (言語間変異) 研究の流れを考察してみたい。

* 本稿は、日本言語学会第163回大会 (2021年11月21日) において行なった「日英語比較統辞論とパラメータの理論—Fukui と Kuroda のシステムの相違点と類似点について」と題する会長就任講演を再構成し、極めて凝縮した形で論じたものである。本稿の執筆にあたっては、中村一創氏 (東京大学大学院) から編集上の助力を得た。また、本誌編集委員会および査読者の方から有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝したい。本研究は科学研究費 (挑戦的研究 (開拓): 脳科学・認知科学による人間に近いモデルに基づく日本語話し言葉解析器の構築と検証 (課題番号 21K18115)) の助成を受けている。

まず次節において、生成文法の基本的問題設定を確認すると共に、そのような問題設定の下における「言語の多様性」研究がどのような基本的性格を持つものであるかを指摘する。さらに、生成文法理論の発展史において、多様性研究が具体的にどのような役割を果たしてきたかを概観する。

第3節では、日本語と英語をシステム全体として比較する「日英語比較統辞論」(comparative syntax)の最初期の研究として Fukui (1986, et seqq.) と Kuroda (1988) を取り上げ、特に Kuroda の提案の特異性に注目しながらこの2つの研究の相違点と類似点を論じる。Fukui と Kuroda の提案は、多くの文献において、基本的に同種の提案(日本語に ϕ 素性が存在しないという提案)を行なったものとして同列に扱われ引用されることが常であるが、そういった扱いは、Kuroda の提案の実質的内容、および両研究が焦点を当てている理論的側面を無視している点でいささか不当なものであることを指摘したい。

第4節において、Fukui と Kuroda の提案以降の生成文法における比較統辞論研究を、少数の中心的話題に焦点を絞って概観する。多様性の根源的原因、言語間変異の位置付け、パラメータ概念の変遷などを論じる。

第5節では本稿の内容を簡潔にまとめると共に、日英語比較統辞論が今後取り上げるべき課題についても言及したい。

2. 生成文法と多様性研究

2.1. 生成文法の基本的問題設定

1950年代初頭に生成文法の企てがその基本的な問題設定を整えようとしているとき、北米の言語学界において支配的な学問的勢力は、論理的経験主義(論理実証主義)、文化人類学、現象学、行動主義心理学などから様々な面で深い影響を受けた「アメリカ構造主義言語学」であった。個々の研究者によるニュアンスの違い、コミットメントの強さの程度はむしろ存在するが、アメリカ構造主義言語学の基本的な考え方は、例えば、Martin Joos が、自らが編集したアメリカ構造主義言語学の代表的論文を集めた論文集において述べた次のようなコメントに端的に表されている。

- (1) Trubetzkoy phonology tried to explain everything from articulatory acoustics and a minimum set of phonological laws taken as essentially valid for all languages alike, flatly contradicting the American (Boas) tradition that languages could differ from each other without limit and in unpredictable ways, and offering too much of a phonological explanation where a sober taxonomy would serve as well. ... Children want explanations, and there is a child in each of us; descriptivism makes a virtue of not pampering that child. (Joos 1957: 96; 強調は原文)

これは Trubetzkoy に代表されるプラーグ学派の音韻論に対比してアメリカ構造主義言語学の考え方を述べたものであるが、「諸言語は互いに制限なく、かつ予測不

可能な形で異なり得る」という (Boas 流の) 認識や、言語現象を一般的な (音韻)「法則」によって「説明」することに対する反感、「説明」ではなく、「記述」および「分類」に重きを置く態度が明確に述べられている。さらに、説明などというものは子供が求めるものであって、(アメリカ構造主義言語学が重視する)「記述主義」は、われわれの中にあるそういった子供っぽい性向が顔を出さないようにうまくそれを律しているのだとまで言っている。

重要なことは、諸言語の「多様性」や言語間の変異は、アメリカ構造主義言語学にとっては所与の厳然たる事実であって、「なぜ」そのような多様性が生じるのかとか、どのような多様性が可能なのか、などという問題は提起されようがなかったということである。そもそも、「説明」を求めることを自らに禁じているのであるから、このような問題を研究課題として立てることそのものが、記述主義の、いわば教義に反していると言うことも出来る。

今述べたような研究態度は、「意味」、話者の意識、等々の、明確に定義されていない曖昧な概念に基づいた「説明」をしがちであったそれまでの言語学の悪しき習慣を克服し、また言語研究に根強い規範的観点も厳格に排除することによって、真に「科学的」な言語学を樹立しようとする試みの結果生まれたものであり、言語学の発展の上で大きな意義があった。さらに、「諸言語は互いに制限なく、かつ予測不可能な形で異なり得る」という認識も、西洋の支配的言語 (例えばラテン語、現在なら英語、等) の特性を暗黙のうちに仮定して、それを通して未知の言語—例えば、ネイティブアメリカンの諸言語、あるいはアジアの諸言語—の現象を分析しようとする態度や、支配的言語の特性をもってして「言語の普遍性」を論じるような態度に警鐘を鳴らすという意味で、重要な役割を果たした。

事実、フィールドワークなどで手にした言語データを対象にして、いかにしてその言語の「文法」(実際には、主に音素分析、形態素分析であるが)を構築するかについてアメリカ構造主義は極めて精緻な分析手続を開発することに成功している (Harris 1951などを参照)。話者の「直観」、意味、等々の曖昧な概念に依拠することなく、実際に観察可能な「分布」(distribution)に主に基礎を置いて、言語要素の析出やその配置に関して非常に精密な分析を可能にする方法を発展させたのである。また、こういった方法を用いて、様々な言語の音素分析あるいは形態素分析がなされたのは学問的に有意義な成果であった。(その一端は、上述の Joos 1957 に収録された論文に見ることが出来る。)

しかし一方で、データの記述に目標を設定し、説明を排したのは、やはり人間が自然にもつ知的好奇心に反することであった。物事の様々な側面に関して疑問を感じ、説明を求める態度は、決して子供のみが持つものではなく、科学者も (そしておそらく全ての人間がその本性として) 有する知的態度であって、子供と科学者が違うのは、子供が無制限に「なぜ」を問い、その説明を他者に要求することが多いのに対し、科学者は、一見当たり前のように感じられる現象の中に不思議な特性を看取り、そのことによって、無制限に生起する諸現象の中から深い法則性や原理

が隠れているような現象を直観的に把握する。そして、それらの現象に対して「なぜ」と問い、その説明を自ら追究しようとするところにある。全ての現象の背後に深い法則性や原理が隠れているわけではない。有意義な形で説明を追究するためには、そのような深い法則性が背後に隠されているような現象に焦点を当て、必要な理想化や抽象化を行なうことにより、背後の深い法則性をあぶり出さなければならない。科学形成の原型ともいべきこの事実は、Galileo やその同時代人たちによる近代科学の基礎の形成過程に典型的に現れている。

1950年代に Noam Chomsky たちが始めた「生成文法の企て」は、まさに、Galileo たちが物理学の形成に対して行なった貢献とパラレルな貢献を言語の一—そしてひいては「心」の一—科学の形成に対して行なおうとするものだった。

Chomsky が人間言語の驚嘆すべき特性として注目したのは、それがもつ「無限性」だった。ある言語の話者は（それがどのような言語であろうとも）、今まで聞いたことがない文（言語表現）を聞いても直ちに理解できるし、また、任意の文を与えられれば、それを基にしてその文よりも長い文を作り出すことが出来る。これはちょうど、人間が任意の自然数を与えられればそれよりも大きい自然数を必ず得ることが出来るのと同様に、驚くべき創造性であり、この創造性は、（アメリカ構造主義言語学が行っていたような）言語データからの要素の析出やそれらの配列を分析することのみによっては的確に捉えることが出来ない。言語データは、どのように巨大なものであっても、原理的に有限だからである。

また、言語がもつ諸特性を捉えるためには、表面に現れる要素間の配列のみに注目していたのでは充分ではなく、それらの要素の背後に控える、目に見えない抽象的な構造（階層構造）がもつ特性に注目し、さらにはそれらの抽象的構造の間に存在する形式的関係を明確に表さなければならない。

こうして、人間言語の本質を「無限性」と「抽象的構造」という基本概念によって把握することにより、「無限の抽象的構造を生成するシステム」として言語の中核的特性を理解するという仮説が生まれる。この「無限の抽象的構造を生成するシステム」のことを、その言語の「生成文法」(generative grammar)、その中枢をなすシステムをその言語の「統辞法」(syntax)と呼ぶ(Chomsky 1951, 1955, 1957等を参照)。統辞法は言語の中枢をなす純粋に形式的なシステム(記号演算システム)であり、その言語の語彙・辞書(lexicon)を材料として無限個の抽象的構造を生成し、言語がリンクしている運用システム(感覚・運動システムと概念・思考システム)に構造を伴った言語表現を送り込む。これによって、当該の言語表現の音声(発音)と意味(解釈)が決定される。

重要な点は、生成文法(統辞法)とここで言われているものは、当該言語の話者(および聴者)が(脳内に)内在化しているシステムに関する理論であって、人間の外に措定される「言語(データ)」に関わるモデルではないということである。アメリカ構造主義の「文法」があくまでも(外在する)言語データのコンパクトな記述を目指すものであったのに対して、生成文法理論で追求されている「生成文法・

統辞法」という概念は、話者が脳内にもつ実在のシステム（専門的には「I 言語」(Internalized, Intensional, Individual language) と呼ばれる) に関わる理論なのである (Chomsky 1959, 1965, 1986b 等を参照)。

ここにアメリカ構造主義言語学と生成文法の極めて根本的な相違点がある。この違いは、分野の性格を変えてしまうほどの違いだと言える。つまり、アメリカ構造主義言語学にとっては、言語学とはあくまでも人間の外 (のどこか) に存在する言語データの厳密な分析を目指す分野であったのに対して、生成文法では、言語学とはある言語の話者が脳内にもつ (すなわち、人間の中にある、人間が内在化している) 言語システムに関わる学問分野であることになる。

ある言語の話者が実際に脳内にもつ言語システム (I 言語) の特性を解明することが目標としたら、では I 言語はどのように個体発生するのかという問題がただちに生じる。この問題を考える上で重要な事実は、まず第 1 に、人間はある特定の言語のみを獲得するように出来ているのではないということである。(ドイツ語のみを獲得できるように生まれてくる人間や日本語のみを獲得できるように生まれてくる人間は存在しない。) **人間言語であればどのような言語でも獲得できる能力**をもって人間は生まれてくる。

第 2 に、I 言語の発生過程を見ると、獲得に必要な入力 (1 次言語データ) と結果として生じる I 言語 (出力) の間に非常に大きな非対称性が見られる。すなわち、I 言語の「中味」には 1 次言語データに含まれる情報をはるかに超えて豊富な情報が入っているのである (「刺激の貧困」(poverty of the stimulus), Berwick et al. 2011 等を参照)。それらの膨大な情報はどこから来るのか。しかも I 言語の獲得は、通常、どのような人間にも一様に可能であり (性別, 知能, 「人種」, 等々はいっさい関係しない), 極めて短期間に、(今述べたように) 内容も乏しくかつ質も整っていない言語データを基にして、明確な指示もなくやすやすと行なわれる (個人的経験, 家庭環境などの条件は本質的に無関係である)。

そして第 3 に、このようなことは、人間以外の動物にはいっさい起こらない。つまり、人間以外の動物が人間言語 (I 言語) を獲得するということが、(習得させようとするたび重なる努力にもかかわらず) およそ不可能であることが判っている。

このような状況を全て勘案すると、I 言語の発生 (言語獲得) には、人間という生物種に固有でかつ種全体に均一に共有されている何らかの「人間言語を獲得する能力」が本質的に関わっているということが強く示唆される。この能力のことを「言語機能」(Faculty of Language), それに関する理論のことを UG と呼ぶが、以下では煩雑さを避けるため、混乱が生じないかぎり UG という表現を能力そのものとそれに関する理論のどちらも指すものとして用いる。UG とは、人間がどのような人間言語 (I 言語) でも一不完全な言語データを基にして極めて短期間に一獲得することを可能にする生物学的形質に関する理論である。

こう考えると、UG は、**人間ならば全て**, そして人間のみがもつ、**いかなる人間言語 (I 言語) でも獲得できる能力**に関する理論であるという意味で「普遍的」な

のであって、ここでいう「普遍性」は、数々の言語を観察して帰納的一般化を積み重ねて抽出した「普遍性」とは意味が異なる（むろん、そのような一般化がUGの研究に有益でないということではない）。August Schleicher, Wilhelm von Humboldt等が唱えた言語の類型説や、Joseph Greenberg (Greenberg 1963) に端を発する類型論的普遍性の研究は、言語間変異に対する極めて興味深い一般化を提示しており、それらが真に言語の普遍的特性を示しているかぎり、何らかの形でUGによって説明しなければならない問題を提起していると言えるが、こういった一般化を基にした「普遍性」と、人間の生物学的特性を対象とするUGとの関係は直線的ではない。柄谷行人は、Immanuel Kantが「一般性は経験的なもので普遍性はア・プリオリなものだといって」と述べているが（柄谷 2020: 428）、比喩的に言えば、ここでも類似の事態が生じているように思える。このことと関連する論点についての論評は、Chomsky (2021a, note 5) 等でなされている。UGに関する数々の誤解や混乱についての議論は、Mendivil-Giró (2018) をみられたい。服部 (1972) にも興味深い指摘がある。

以上のようなUGの存在を想定すると、今度はI言語が示す「言語の多様性」が問題になってくる。アメリカ構造主義言語学においては、「諸言語は互いに制限なく、かつ予測不可能な形で異なり得る」という「言語の多様性」は、事実そのものであって、それ以上そこに何か説明すべきものはなかった（そもそも、アメリカ構造主義は「説明」を忌避していた）。ところが、生成文法のように人間言語を対象として「理論的説明」を求める研究プログラムにとっては、「言語の多様性」は説明を要する現象になる。なぜなら、もしUGが人間に生物学的に賦与されている（生得的な）形質であるならば、それが成長と共に周囲の刺激・環境（1次言語データ）の種類によって「ある程度の変異」を生ずるという事実は、視覚や数覚（自然数の概念、数を数える能力）などの他の認知能力には見られない現象だからである。したがって、UGの提案は以下の認識を含意する。

(2) 言語の多様性は、説明を要する驚くべき現象である。

この認識は、生成文法の誕生とともに、いわばUGの概念と表裏一体をなす形で生じたものであり、それまでは当たり前のこととして単に前提にされていた現象を「説明を要する驚くべき現象」として提示したことは一その問題に対する解答が充分納得がいくものかどうかは別にして一高く評価されてよいことだと思う。

2.2. UGと多様性：パラメータ概念の導入

人間言語の普遍性と多様性は、生成文法の提唱以来、言語理論が取り組むべき大きな問題として意識されていたのだが、実際には、生成文法が言語の多様性に正面から取り組めるようになるためには、かなりの時間が必要であった。アメリカ構造主義言語学が主流であった学界において、理論的研究の重要性、「説明」の必要性、表面的で観察可能な要因のみならず抽象的な概念を用いた分析の有効性、等々をま

ずは定着させなければならなかったからである。そのためには、話者の内在的言語能力（I 言語）を明確に把握し説明できるような文法（I 言語に関する理論）を個別の I 言語に対して開発しなければならなかった。

こうして、1950年代から1970年代までの生成文法研究は—UGの存在をはっきりと意識しながら—現代ヘブライ語、ロシア語、英語、フランス語、モホーク語、日本語、等々の個別 I 言語の文法を構築することに集中したのであるが、そういった作業の中でも、UGを念頭に置くことによって、個別 I 言語間をいわば横につなぐ意識が強く言語学者に芽生えたことは、このアプローチの明白な利点であった。ロシア語の関係節の特性が英語の WH 疑問文の分析に何らかの含意を持ったり、日本語の話題化構文の分析が（英語などを含む）諸言語で観察される変換の一般的特性に重要な示唆を与えるといった関係は、「諸言語は互いに制限なく、かつ予測不可能な形で異なり得る」という想定の下ではあり得ないことであり、そういう意味では、この時期の生成文法が「言語の多様性」の研究に対して（ある意味、逆説的な）貢献をなしていたことは特筆に値する。

別の言い方をすれば、「一般言語学」という概念が、「どのような言語の分析にも用いることが出来る一般的分析方法の研究」というアメリカ構造主義言語学における意味ではなく、「一般言語」という実体を対象にする科学という意味を持つためには、UGという「一般言語」の存在が不可欠であり、またUGを想定することによって初めて、言語の多様性は「互いに制限なく、かつ予測不可能」という恣意性から離れて有意義な形で考察の対象になるのである。

しかしながら、生成文法が本格的に言語の多様性に取り組み始めたのは、個別 I 言語の詳細な研究を通してUGの姿がある程度明確な形で認識され始めた1980年前後である。この時期の出発点となる著作であるChomsky (1981)では、生成文法が取り組むべき問題を次のように規定する。「刺激の貧困」を含む、上述の言語獲得（I言語の個体発生）に関する事実を説明するために、UGは「可能な人間言語（I言語）」を十分に狭く規定しなければならない。しかし同時に、UGは、実際に存在する諸言語（I言語）の多様性と合致する形をしていなければならない。一見矛盾するかのように見えるこの2つの条件を満たすためには、次のような構成をUGは取るべきであるとChomskyは主張する。（ここでChomskyがgrammar, languageと言っているのはI言語と同義である。）

- (3) What we expect to find, then, is a highly structured theory of UG based on a number of fundamental principles that sharply restrict the class of attainable grammars and narrowly constrain their form, but with parameters that have to be fixed by experience. If these parameters are embedded in a theory of UG that is sufficiently rich in structure, then the languages that are determined by fixing their values one way or another will appear to be quite diverse, since the consequences of one set of choices may be very different from the consequences of another set; yet at the same

time, limited evidence, just sufficient to fix the parameters of UG, will determine a grammar that may be very intricate and will in general lack grounding in experience in the sense of an inductive basis. (Chomsky 1981: 3-4; 強調は引用者)

ここで初めて parameter (パラメータ) という概念が示され¹、「パラメータを組み込んだ UG」の構想が提出される。UG を構成する一般的原理が「人間にとって可能な I 言語」を厳しく限定し、同時に、未定になっているパラメータの値を (1 次言語データに基づく) 経験によって決めることによって対象となる I 言語の個別特性を決定する。こういった UG の枠組みを「原理とパラメータ」(principles-and-parameters) のアプローチと呼ぶ。

この枠組みを仮定すると、言語獲得 (I 言語の形成・決定) は以下の 2 つの要因からなることになる。

- (4) 言語獲得 (I 言語の形成) の要因
 - (i) 語彙の獲得
 - (ii) 経験によるパラメータ値の決定

(4i) の要因は、いわば個別 I 言語の決定における不可欠の最終要因のようなもので、どうしても排除できないものであり、かつ、(おそらくその本質からして) 理論化が困難な要因である。(ただし、語彙獲得も、一般に思われているよりもはるかに深く生得的要因に支配されている。たとえば、Gleitman (2020) に収録されている諸論文を参照。) (4ii) がこの枠組みの特徴で、それまでは個別 I 言語がもつ特有の (しかしその一般形式は UG によって規定されている) 「規則のシステム」を学習しなければいけないと考えられていた部分は、実はパラメータ値の決定に過ぎず、規則の学習ではないと考えるのである。こういった主張が可能になったのも、個別 I 言語の「規則」がもつ普遍的特徴が充分深く研究され、それらの「規則」が UG の諸原理からの帰結として導出される副次現象であることが、1970 年代までの研究で示されたからである。こうして、言語間変異 (言語の多様性) を主に担う要因として、語彙とパラメータが抽出された。

それではパラメータとはどのような特性をもつものなのだろうか。最初に留意しなくてはいけない点は、UG において設定されるパラメータの数は、他の理論的概念と同様に可能な限り少数に限定されていなければならないということである。このことはパラメータに限らず、また生成文法における UG に限らず、科学における理論一般に成り立つ特性であるが、「説明」を追求するのであれば、設定される理論的概念・装置の数はなるべく少なく抑えなければならない (Goodman 1943, Chomsky 1951, 1995, 2021b)。そしてそれらの理論的概念・装置がなるべく多くの (種類の) 現象を導出できるようにしなければならない。理論の説明力とは、基本的に、

¹ Chomsky 自身は 1970 年代中頃からパラメータの概念に言及し始めている。Chomsky (1976, 1980) 等を参照。

その中で指定される概念・装置と説明される諸現象の数・種類の「比」によって表されると言ってもよいだろう（より少ない概念・装置でより多くの現象を説明できるほど、その理論の説明力は高くなる）。

次に、パラメータの値は経験（1次言語データ）によって、簡単に決定できるように設定されていなければならない。これは言語獲得に関する上述の様々な事実を勘案すれば自然に出てくる要請であるが、この要件によって、パラメータを設定する理論内の場所、言い換えれば、言語間変異が許されるUG内の領域および変異の性格に関して、極めて一般的な限定が可能になる。たとえば、音声に反映されない領域（S構造から論理形式に到る領域など）にパラメータを設定することは、学習可能性に関わるこの要件によって基本的に排除されることになる。また、経験によって容易にその値が決定されなければならないという要件は、パラメータ値が2値的（binary）であることも強く示唆する。

パラメータの概念が初めて提案された1980年代の初頭には、こういった見通しのもと、いくつかの具体的なパラメータが提案された。代表的なものをいくつか挙げると、Xバー理論に関わる主辞パラメータ（head parameter）、下接条件において役割を果たす境界節点（bounding node）に関するパラメータ（Rizzi 1982）、定形節において音形をもつ主語が必須かどうかに関わる「空主語パラメータ」（null subject parameterあるいはpro-drop parameter）（Taraldsen 1978, Chomsky 1981, 1982, Rizzi 1982, 1986, 等）、当該言語の句や文の構造が構成的・階層的かどうかに関する構成性パラメータ（configurationality parameter）（Hale 1982, 1983）、顕在的WH移動が要求されるかどうかに関わるパラメータ（Huang 1982）、等々がある。

しかしながら、これらのパラメータの特性やUGの理論内の位置づけは一様ではなかった。主辞パラメータは、Xバー理論という句構造原理に付随するパラメータであり、極めて局所的なデータによってその値を決定することが出来る（主辞が最初に来るか、最後に来るかの2値）。そして、（日本語と英語において典型的に見られるように）一度ある範疇—例えば、VP—に関して値が定まってしまうと、他の範疇—例えば、PP, NP, CP, 等—の値も含意するという「クラスター効果」（clustering effect）²も持つ。こうしていわば「模範的な」パラメータとして主辞パラメータは多くの文献においてパラメータの代表として挙げられるようになった。

全てのパラメータがこのように模範的な特徴を示すわけではない。境界節点に関わるRizziのパラメータは、下接条件という原理に付随するパラメータであるが、その値（Sを境界節点とするかS'を境界節点とするか）を決定する上でどのように「簡単で局所的」な事実が関わっているかは必ずしも明らかではないし、このパラメータが当座の説明対象となる現象（WH島条件効果の有無—英語には存在す

² 本稿では「クラスター効果」という表現を「複数の事象がひとまとまりになって生じる」という広い意味で用いる。したがって、以下で論じる統辞的主辞の特性が一般化されてパターンを示す現象も、複数の統辞の特徴がひとまとまりになって出現する現象も「クラスター効果」として言及する。

るがイタリア語には観察されない) 以外にどれほどの拡がりをもつかは定かではない。空主語パラメータの本質は, Chomsky (1981, 1982) や Rizzi (1986) などでも詳細に論じられているが, このパラメータの実体は必ずしも明確になったとは言えない。屈折要素 (INFL) に含まれる一致素性が重要な役割を果たしていることとか, 主語の倒置現象の存在が空主語の存在と密接に関連しているなどの指摘はあったが, 究極的に何が (イタリア語やスペイン語の) 空主語現象に関わるパラメータなのかについての結論は出ていないと言える。このパラメータが示すクラスター効果についても明確な結論は出ていない。

Ken Hale が一連の著作で提案した構成性パラメータは, それがもつクラスター効果において際立っている。Hale は下記のような特性がひとまとまりのクラスターとしてある種の言語を特徴づけていると主張した (Hale 1982, 1983 を参照)。

- (5) a. 自由な語順
- b. 非連続 (名詞) 表現の使用
- c. 自由な・頻繁な代名詞省略
- d. NP 移動の不在
- e. 虚辞 (pleonastic, expletive) の不在
- f. 豊富な格システム
- g. 複合的動詞形式あるいは動詞・助動詞 (verb-cum-Aux) システムの存在

これらの諸特性を一種の「診断規準」として, Hale は「非構成的言語」を規定し, (5) のような特性をもつ非構成的言語は, その句構造が平板型で非構成的であるとした。ワルピリ語 (Warlpiri) を代表とするこれらの非構成的言語は, 英語 (や他の印欧諸語) のような構成的言語と句構造 (文構造) のもっとも基本的な部分で対照をなす。英語は構成的言語で (5) に挙げられているような特性は示さず, ワルピリ語は非構成的言語で (5) の特性を有する。つまり, ある言語が非構成的言語であれば (5) の諸特徴を持つことが予想され, これらの諸特徴がクラスターをなすことが説明される (詳細は Chomsky 1981, Hale 1983 などを参照されたい³⁾。

構成性パラメータは, それまで一部の言語 (英語, フランス語, イタリア語, ドイツ語, スペイン語など) のような印欧諸語の一部分) に限られていた比較統辞論研究をより広い種類の言語にまで拡げると共に⁴⁾, このようなクラスター効果を生む点において極めて興味深い提案であるが, 上述の (5) に代表される諸特性と非構成性の関係は, あくまで重要な一そして理論的に説明されるべき一相関性を示してい

³ Chomsky (1981) や Hale (1980a, b) などでは, 日本語も非構成的言語であるとされている。日本語が構成的言語か非構成的言語かは 1980 年代を通しての論争点となる。Hoji (1985), Saito (1985) 等を参照。

⁴ この点では, Huang (1982) による顕在的 WH 移動に関するパラメータも同様である。ただし, Huang の研究は多くの言語を比較考量することによって一般化を得るというよりは, 英語と中国語を, それらが示す深い統辞的特性を通して研究することにより, UG とパラメータ研究に貢献しようとする点において,むしろ後述の Fukui や Kuroda の研究と同種の探究と言える。

るに過ぎず、それらの間の因果関係を捉えているわけではなかった。Chomsky(1981)やHale(1983)は投射原理(Projection Principle)と構成性の関係を用いた巧妙なパラメータ化を試みているが、それとても自然な理論的説明とは言えないものであった。さらに、構成性パラメータの値を決定する局所データに関する議論もあまり深まらなかった。

次節で議論するFukuiとKurodaの研究は、このようなパラメータ研究の初期における萌芽的状况の中で行なわれたものである。

3. 日英語比較統辞論：FukuiとKurodaの提案

Kuroda(1988)で提出された日本語と英語の統辞法に関する比較研究と、Fukui(1986, 1988, et seq.)において展開された日英語比較統辞論研究は、ほぼ同種の主張を行なったものとして引用されることが多いが、実際にはこれらの研究の背後にある文法観や統辞法のメカニズムに関する具体的提案、さらには日英語の間に存在する「パラメータ」的相違についても、両者の研究は根本的に異なる主張をしている(重要な類似点も、後述のように、むしろ存在する)。将来の日英語比較統辞論研究の健全な発展のためにも、最初期に行なわれたこれら2つの研究を正確に理解することが必要であると判断し、本節では、ごく概略的ではあるが、これらの提案の骨子をまとめてみたい⁵。紙幅の関係で十分な例を挙げるが出来ないので、細部に関心がある読者はぜひ原論文に当たられたい。

説明の都合上、まずKurodaのシステムの内容を論じ、次にFukuiのシステム、最後に両システムの類似点および相違点をまとめる。

3.1. Kurodaのシステム

3.1.1. 言語の幾何学を求めて

幾何学とは、変換(transformation)のもとで不変の性質を研究する分野であり、これらの変換が当該の空間を特徴づける、という考えは、様々な幾何学が提案される状況において幾何学という概念の一般的規定を与えようとして、19世紀後半にFelix Kleinが提出した「エルランゲン・プログラム」(Erlangen Program)の中心的な主張である。KurodaはZellig Harrisの変換概念にこれと同種の思想を見だし、自らもこの考えを延長することにより、当時の「GB理論」(Government-Binding Theory)に基づく変換文法(transformational grammar)を「言語の幾何学」として特徴付けることを目指していた。この考えに基づけば、Xバー理論がいわば「言語の空間」(あるいはregion)を特徴づけ、その空間において適用される形式的関係

⁵ 故黒田成幸氏と筆者は、お互いの研究の類似点と相違点について数多くの議論を重ねてきた。したがって、本節で述べる内容は、ほぼ両著者の合意に基づくものと言っていいと思われるが、むしろ、述べられていることに対する責任は筆者のみが負う。なお、本節の内容の一部は、Fukui(2011)において(極めて凝縮された形で)論じたことがあるし、2018年夏に九州大学で行なった講演や上智大学大学院における講義でも触れたことがある。

および演算（たとえば、 a 移動）が「変換」にあたり、その変換のもとで（投射原理などの普遍原理によって）保持される不変の性質を研究する領域が統辞法（変換文法）、すなわち「言語の幾何学」であるということになる⁶。

このように統辞法を捉える見方は、語彙を材料（入力）として取り、それに形式的演算を派生的に適用することにより、無限の言語表現を生成するという標準的な解釈とは大きく異なっている。したがって、次節で見えるように、標準的な統辞法観に基づいた Fukui のシステムとも、その発想の時点で大きく異なっているのである。このことは、両者のシステムが提出する具体的な分析の背後に横たわる根本的な相違点として、まず理解しておかなければならない。

3.1.2. Xバー理論

Kuroda は、当時 Chomsky (1986a) などと提案されていた Xバー理論、中でも範疇の投射形態を規定する「Xバー式型」(X-bar schema) をほぼそのまま仮定し、それを VP (動詞句) の内部構造にもそのまま適用することを提案する⁷。これは、D 構造における VP の指定部 (specifier) の位置を空にしていた、当時の標準的分析とは異なるものである。

(6) Xバー式型

$$a. X' = X/X' Y''$$

$$b. X'' = Z'' X'/X''$$

(6) は Chomsky (1986a: 3) で提案された式型を適宜解釈したものである（左右順序関係は定義されていない；主辞パラメータを参照）。Chomsky の原案は、「Kleene の star (*)」を用いて、主辞 X の補部 ((6a) の Y'') や指定部 ((6b) の Z'') の任意の数の生起を許すことにより「平板構造」を許容するものであるが、同様の効果をもつ再帰構造 (recursion) は平板構造を許さなくとも (6) のような定式化をとれば可能である（詳細は Fukui 2001 などを参照）⁸。いずれにしろ、ここでの議論のためには、補部および指定部の繰り返しが許容されることを確認すれば充分である。

Xバー式型を（再帰構造の部分を除いて）基本的な文構造に適用すると、以下のようなになる。（I = Inflectional elements (屈折辞), C = Complementizer (補文化辞), e は主に代入変換の着地点を確保するための空範疇。Δと表記されることもある。）

⁶ この背景は Kuroda (1988) では全く触れられていないが、同時期に執筆された Kuroda (1987-1988) においては明確に述べられている。

⁷ Kuroda は X の最大範疇を XP や X'' ではなく Max(X) と表記する。したがって、VP/V'' は Max(V) となる。また、補部や指定部のことをそれぞれ「内的補部 (Internal Complement)」, 「外的補部 (External Complement)」と呼ぶ。以下の記述では、混乱の恐れがないかぎり、(当時の、あるいは現在の) 標準的用語と Kuroda の用語を適宜用いることにする。

⁸ UG は平板構造を許容しないとする想定が1990年代以降一般的であるが、平板構造の位置づけは一構成性パラメータにおける平板構造の提案を別にしても—それほど明らかとは言えない。Chomsky (1965; Chapter 1, note 7), Chomsky (2021a) などを参照。

(7) $[c^e [c^C [r^e [r^I [v^e [v^V X'']]]]]]$

これを見てもわかるように、Kuroda のシステムでは X バー理論が全体の枠組み（空間あるいは region）を用意しているのであって、その用意された枠組みにおいて形式的関係が定義され、 α 移動などの演算が適用される。

この考えを自然に延長すれば、「V」の指定部（Kuroda の用語では Max(V) の外的補部）の位置は（当時の標準的分析のように）D 構造において空ではなく、主語がその位置に生成されることになると Kuroda は主張する（のちに「VP 内主語仮説」（VP-internal subject hypothesis）と呼ばれることになった仮説である。Koopman and Sportiche 1991 なども参照）。そうすると、(7) における X'' の位置には目的語が生成されるとするのが標準的分析であるから、D 構造における基本的文構造は以下のようになる。

(8) $[c^e [c^C [r^e [r^I [v^{\text{主語}} [v^V \text{目的語}]]]]]]$

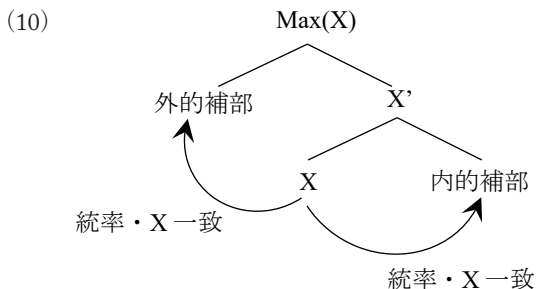
(8) では、主語も目的語も V の投射内に生成され、述語・項（predicate-argument）関係が V の最大投射の内部で完結することになる。そして、C'' と I'' の指定部（外的補部）の位置にある e が α 移動の移動先ということになる。当時の一般的分析では、C'' の指定部は WH 移動の移動先であり、I'' の指定部は主語が基底生成される位置であった。Kuroda の分析は、I'' の指定部がすでに（D 構造から）埋まっているのではなくて、基底段階では空（ e ）である点が標準的分析と異なっている。

3.1.3. X 一致 (X-Agreement)

前節で説明した X バー理論が提供する構造の上に、Kuroda は「X 一致」(X-Agreement) という形式的関係を定義する。(Kuroda は UG の命題を U-1, 2, … と番号付け、日本語文法に係わる命題を J-1, 2, … と、英語文法に係わる命題を E-1, 2, … と名付けている。以下、Kuroda 1988 からの引用の頁番号はすべて Kuroda 1992 に再録された版のものである。)

(9) Assumption U-4: X-Agreement is a feature-sharing (co-specification) between a base category and a Max(X) that it governs. (Kuroda 1988: 323; 352 も参照)

ここでの government (統率) は、 c 統御ではなく、いわゆる m 統御 (m -command) を用いた緩い統率の概念である。主辞（基本範疇、base category）は、基本的に自らの投射内の全ての位置（内的補部、指定部・外的補部）を統率し、その結果、それらの要素との間に、X 一致関係が生じ得る。



X一致の概念は、格標示 (Case-marking) と WH 移動 (WH 牽引) の概念を統一化したものである。つまり、X一致における「X」は「格」(Case-Agreement)であったり「WH」(WH-Agreement)であったりする（他にも候補があるかも知れないが、Kuroda は θ 標示 (θ -marking) の可能性以外は特に言及していない)。さらに、Kuroda は X一致が通常の意味での「一致」(agreement), すなわち、いわゆる ϕ 素性 (人称, 数, 性の素性) の一致とどのような関係にあるのか、それとも関係がないのかについては判断を留保すると述べている (p.323)。

周知のように、日本語には格助詞 (case-marker) による形態的格標示があるが、Kuroda はこのプロセスを “lower-case case-marking” と呼び、標準的な Case-marking (upper-case Case-marking) と区別する。そして、統率の概念により規定されていた Case-marking に対し、それとは別のメカニズムによって（そのようなメカニズムに関する提案を Kuroda は別の論考で既に行なっている）付与される case-marking が用意されている日本語においては、Case-marking は名詞句 (項) の認可方法として必要不可欠ではないのではないかと推論を進める。

- (11) Principle of Morphological Licensing: Arguments must be licensed by Case or case.
(Kuroda 1988: 352)

すなわち、名詞句 (項) は Case か case かどちらかひとつの方法で認可されていれば適格性を満たすという選択肢が日本語には存在する。そうであれば、英語のように格助詞が存在しない言語において義務的である Case-marking は、日本語では義務的ではないのではないかと。格付与が随意的であれば、上述の一般化により WH 移動を含む X一致全体が日本語では随意的なのではないか。この洞察を Kuroda は次のような「X一致強制化パラメータ」ともいうべき仮説として提示する。

- (12) Principle of Forced Agreement Parameter: Languages are parametrized as to whether X-Agreement is forced or not.
(Kuroda 1988: 352)

つまり、諸言語は（それ自体は普遍的に存在・成立する）X一致が「強制されるか否か」という点においてパラメータ化されているということである。

この「強制化パラメータ」を提案するに際し、Kuroda は「位置に係わる X 一致」と「範疇に係わる X 一致」の区別を導入している。主辞 (Kuroda の用語では「基本範疇」) は、それが統率する補部 (内的補部) と指定部 (外的補部) という「位置と X 一致する」。これは UG の原理であり、「強制化パラメータ」とは独立した普遍的現象である (Kuroda 1988: 324)。そして、もし当該言語が「X 一致強制言語」ならば、主辞と位置的に X 一致している場所は適切な最大範疇によって占められていなければならない。それに対して、「X 一致非強制言語」においては、当該の位置 (補部および指定部) は空のままでも良いし、X 一致に関わりがない最大範疇によって占められていても良い。

こうして「X 一致」そのものの普遍性を論じたあと、日本語と英語に関して次のような仮説を Kuroda は提案する。

(13) Proposition E-5: English is a forced Agreement language. (Kuroda 1988: 325)

(14) Proposition J-11: Japanese is not a forced Agreement language. (Kuroda 1988: 326)

英語は X 一致強制言語である。したがって、主辞はそれが統率する位置と X 一致し、そこに適切な最大範疇・最大投射が生起することを要求する。それに対して、日本語は X 一致非強制言語なので、主辞が X 一致する位置に適切な最大範疇 (典型的には Max(N)) が生起する必要はない。

X 一致に関わる自然な予備仮説として、(1) X 一致は S 構造において適用される (Kuroda 1988: 324) という仮説と、(2) X 一致は一意的であり (Kuroda 1988: 353; Assumption U-6) かつ、二重 X 一致は許されない (Kuroda 1988: 353; Assumption U-5) という仮説を提案した上で、Kuroda はこの強制化パラメータに関わる違いから英語と日本語の間に存在する様々な統辞的差異を演繹的に導きだそうとする。詳細の説明は省かざるを得ないが、例えば、英語の主語は Vⁿ /Max(V) の指定部に生成されたあと (これは普遍的な位置)、INFL と X 一致して格を付与されるために I の指定部の位置に移動しなければならない。WH 要素は C と X 一致するために C の指定部の位置に S 構造において存在しなければならない (S 構造までに移動しなければならない)。これらの要素は、上で述べた X 一致の一意性のために、1 つのみ当該の位置に生起できる。つまり、英語において主語は 1 つしか許されず、WH 要素は 1 つだけ C の指定部に強制的に移動する。また、I (NFL) が格付与の素性を持っているときは、(一意的な X 一致が強制されるので) 何らかの要素が I の指定部に生起しなければならない。θ 関係などの他の条件が満たされず、主語が現れ得ない場合は、X 一致を満たすための要素 (虚辞, expletive/pleonastic) が要求される。こうして、いわゆる「EPP 効果」(Extended Projection Principle effect) が得られる。

これに対し、日本語は X 一致非強制言語であるから、主語は D 構造で生成された V の指定部の位置から移動する必要はない。I の指定部に移動しなくても、主語には lower-case case-marking (「が」付与) が (統率や X 一致とは関係なく) 適用さ

れ、これによって主語の $\text{Max}(N)$ は認可される。したがって、I の指定部の位置は空のままである。この位置には、もちろん主語が「随意的に」移動しても良いし、他の項 ($\text{Max}(N)$) が移動しても良い。しかも X 一致は強制されていないのだから、それらの要素が1つである必要もない。こうして、多重主語（多重主格）やかき混ぜといった現象が I の指定部の位置で起こることになる。さらに、I の指定部の位置に X 一致が強制されることはないのだから、虚辞が存在する理由はない（したがって、EPP 効果も日本語では観察されない）。C の領域においても X 一致は強制されていないのであるから、義務的 WH 移動は存在せず、反面、C の指定部の位置に1つ以上の要素が随意的に生起することが出来る。これが話題化現象 (topicalization) である。

ちなみに、X 一致（格）は目的語が関わる場合は、V とその内的補部の間で起こる。もし日本語において X 一致が強制されていないのならば、目的語に対する格付とは（主語の場合と同様に）多重的に起こるはずである。これに対しても Kuroda は説明を用意しており、実際に日本語には多重目的語（多重対格）構造が存在するが、表層的フィルター（いわゆる Double-o Constraint）の効果によりそれが表に現れてこないのであり、分裂文などの工夫をこらしてやれば（すなわち Double-o Constraint に抵触しないように調整してやれば）複数の目的語（対格）が共起することを示せるとしている。

以上が Kuroda のシステムの概略である。格助詞省略現象や異なった種類の多重主語構文に関する分析など、他にも論じるべき点は数多いのだが、Kuroda の提案の骨子を理解するためには以上の説明でほぼ充分だと思う。

3.2. Fukui のシステム

Fukui の提案に関しては、元の文献以外にも、すでに Fukui (1995, 2001, 2011) などである程度詳しく説明してあるし、福井 (1989) ではあまり技術的ではない形での解説も行なっているので (Chomsky (1988) にも簡潔な紹介がある)、以下では（紙幅の都合もあり）核となるアイデアだけを極めて簡潔に述べるとどめたい。

3.2.1. 構造構築と移動の統合：X バー式型の廃棄

Fukui の提案の根幹にあるのは、それまで別のモジュールと仮定されていた句構造の理論（構造構築と X バー理論）と移動の理論を統合し、両者に共通の操作 (Adjunction, 「付加」) が関与しているという主張である。このために、構造構築を規制している X バー式型を廃棄し、言語における構造構築は、語彙項目に「付加」操作（近年の枠組みにおける併合 (Merge) に類似した操作）を適用することによってより大きな構造を生成するシステムを考え、「最大投射」の概念なども、従来のパー・レベル概念と分離し、当該の投射が停止した「もっとも構造的に上位の」投射体として相対的に定義する。一方、移動の理論においても、従来の「代入」(substitution) と「付加」(adjunction) の二択を廃止し、その形式的性格に極めて

て疑わしい点がある空範疇 Δ (上述 (7), (8) を参照) を設けることによって定義されている代入変換の概念を廃棄することによって、移動に関わる操作を付加操作 (Adjunction) に一本化する。(ただし, Adjunction は構造保存的 (structure-preserving) である点も含め、従来の代入変換の特性も併せ持つことに注意。)

これらは非常に大きな理論的改変であるが、上述の様々な文献において詳述しているように、十分な根拠がある提案であると思う。このようにして、構造構築を Adjunction によるボトムアップの過程と考え、移動を Adjunction のみによって構成される現象であると考えれば、構造構築と移動とは、少なくとも「移動先」の局所領域を考えるかぎり、同一の演算によって行なわれているという分析が可能になる。こう考えると、移動の特殊性は、移動先と元位置との間の関係付けに還元されることになる。近年の枠組みにおける併合は、この意味における Adjunction に極めて近い操作であるし、移動先と元位置との関係付けは「コピー」の問題として現在では扱われている。

3.2.2. 機能範疇：C, I, D

Fukui のシステムの第 2 の特徴は、従来、「その他」の範疇類として取り扱われ、その特性が明確には考察されていなかった非語彙範疇を「機能範疇」(functional categories) というまとまったクラスとして規定し、言語においてそれらの要素が果たしている役割を明らかにした点である。それまでの非語彙範疇には I と C が含まれていたが、これに D (Determiner) を加え、ある種の言語における名詞表現 (nominal expression) (の一部) は D の最大投射であるとする分析を提案した (DP 分析 (DP analysis) ; Fukui and Speas 1986, Abney 1987 等を参照)。これによって、文・節には 2 つの機能範疇投射 (I の最大投射 (Max(I)) と C の最大投射 (Max(C))), 名詞表現には D の最大投射 (Max(D)) が存在することになる。

語彙範疇と機能範疇の根本的相違点は、前者が述語・項構造を形作るのに対し、後者は言語の「計算的 (文法的) 側面」(および、いわゆる情報構造・談話機能に関わる側面) をつかさどる点にある。すなわち、V, N などの語彙範疇は (言語の核になる) 述語・項関係、および θ 関係を規定しているのに対して、機能範疇は移動を引き起こしたり、文法的な一致現象 (formal agreement) に関与したりして、言語の計算的 (文法的) 側面において大きな役割を果たしているのである。

こう考えると、文における主語は Max(V) の内部に生成されるという分析がいれば理論的帰結として出てくる (X パー式型を仮定している上述の Kuroda とは異なる理論的理由であることに留意されたい)。Max(V) において生成された名詞句 (Max(N), ある種の言語では Max(D)) は、I に牽引されて一致を起こしたり、格を与えられたりする。さらに、WH 要素は C に牽引されて WH 移動現象を引き起こす。DP 分析を採用することにより、Max(I) で起こっていることと並行的な分析を名詞表現に対しても適用することが出来る。つまり、名詞表現における主語は Max(N) 内部に生成され、(ある種の言語では) D に牽引されて Max(D) の指定部で格 (属

格)を与えられる。この分析だと、文においては Max(V)に生成され、名詞表現内では Max(N)内に生成された主語が、それぞれ Max(I)の指定部と Max(D)の指定部において主格と属格を与えられるという分析が可能になる。3.1.2節で述べた「VP内主語仮説」よりもさらに一般的な「述語内主語仮説」(Predicate-internal subject hypothesis)である。

Dによる牽引で付与される属格、Iによる牽引で生じる主格、Cによる牽引で与えられるWH素性を Fukui and Speas (1986)は「Kase」と呼んで統一的に扱うことを提案している。この意味における Kaseは、すべて機能主辞とその指定部の間で成立する「指定部-主辞一致」(Spec-head agreement)によって認可される。V,Nなどの語彙範疇は指定部-主辞一致は引き起こさない。したがって、「一致に関与する Max(X)」という特定の意味での「指定部 (Spec)」も持たない。

3.2.3. 日英語統辞法の根本的相違点

以上、極めて凝縮した形で Fukui のシステムを説明した。このシステムのもとで、日本語と英語の根本的相違点を述べると以下ようになる。

- (15) 日本語の語彙 (Lexicon) には、「活動的な」(指定部-主辞一致を引き起こす)機能要素が欠如している。

すなわち、日本語には一致を引き起こす I, C, D が存在しないということになる。「活動的な」という意味は、これらの要素が主辞としては存在しているが、一致を引き起こす機能は持っていない(必要な素性を有しない)という意味にも解釈できるし、そもそも一致をいっさい引き起こさない機能主辞というものは「主辞」として統辞法システムの中に存在しない(音形をもつ場合は隣接する語彙要素の接辞として働く)という解釈も可能である。どちらの解釈を採るかは、「統辞法における主辞」という概念をどう特徴付けるかにかかっている。これは現代的意味のある重要な問題であるが、ここではこれ以上追究しない⁹。

(15)の仮説を採れば、一致を引き起こす機能主辞を持つ英語において起こっている典型的な現象—たとえば、Iの指定部への主語の移動、Cの指定部へのWH要素の移動、属格付与のためのDの指定部への移動—は日本語では全て起こらないことになる。Kurodaと同様に Fukui も一致の「双一意性」(biuniqueness)を仮定するので(ただし、Fukuiのシステムでは一致は機能主辞とその指定部の間だけで起こる現象であることに注意)、英語において機能主辞の指定部の位置に「義務的にかつ一意的に」現れている要素(文の主語(虚辞を含む)、前置されたWH要素、名詞表現の属格、など)は、日本語では「随意的にかつ複数」現れることが可能になる。英語においては、機能主辞の持つ一致素性(Kase)がその投射を義務的に「閉じる」役割を果たしていたのに対し、日本語にはそのような要素が欠如していた

⁹ 関連する議論については Nakamura (2020) を参照。

め、義務的移動もない代わりに、Adjunction の随意的および反復的適用によって複数の要素 (Max(X)) が投射の端 (一般的な意味での「指定部」の位置) に現れることが出来る。

これが、日本語に多重主格, 多重属格, かき混ぜ構文, 多重話題化構文, 等が存在し、逆に虚辞や義務的 WH 移動が存在しない理由である¹⁰。全体として Fukui のシステムが捉えようとしている直観は、上述の指定部-主辞一致が投射を閉じる機能を持ち、英語はそれに応じて諸々の (義務的移動, 虚辞の挿入, 等) 統辞過程により投射が閉じられるが、日本語は指定部-主辞一致を引き起こす機能主辞が語彙に存在しないため、投射が閉じられることがない—したがってその「端」で Adjunction が繰り返し適用可能である—ということである。指定部-主辞一致がないため、日本語では投射が常に開放されており、UG がもつ非有界 (unbounded) の構造生成機能がそのまま現れていると言ってもよいだろう。

3.3. Fukui と Kuroda の提案の相違点と類似点

説明の都合上、まず相違点を論じ、その後、類似点を見ていきたい。

3.3.1. 相違点

3.3.1.1. 幾何学的 (表示論的) vs. 派生論的言語観

本節の初め (3.1.1. および 3.1.2.) でも述べたように、Kuroda の言語観は幾何的 (あるいは表示論的, representational) であり、X バー式型が提供する枠組みの中に形式的関係を定義し、さらに変換 (群) の特性を見ることによって、「言語の幾何学」を考察したいというのがその基本姿勢である。そのため、X バー式型は当時の標準的提案をほぼそのまま認め、この式型が不変の構造的スキーマを提供する。したがって、補部 (内的補部) や指定部 (外的補部) の位置は、他に何の要請がなくても X バー式型がその存在を含意する。この不変の枠組みに関しては日英語の違いは存在しない。

一方で、Fukui の言語観は、ボトムアップ式の繰り返し演算によって一段一段構造が構築されていくとする「派生論的」(derivational) なものであり、投射形態を規制する一般原理としての X バー式型は廃棄される (「投射」(projection) の概念は維持)。したがって、指定部も補部も何らかの文法的要請がなければ存在しない。さらに、機能範疇という概念を導入することによって、述語・項構造を支える語彙範疇と言語の計算的側面をつかさどる機能範疇を明確に区別し、それらの投射形態を区別することが可能になった。端的に言えば、指定部-主辞一致という関係を担う要素という意味での「指定部」(Spec) は、機能範疇の領域にしか存在しないと

¹⁰ 他に、D の不在により日本語における代名詞システムの不在が説明される可能性も Fukui は論じている (Postal 1966 などを参照)。日本語における受動構文、空所のない話題化および関係節構文、複合述語の形成、等の特性に関してもこのシステム (および (15) の仮説) によって説明される可能性があるが、ここでは論じない。

いう特徴付けが可能になったのである。つまり、Kuroda のシステムにおけるような不変の構造的枠組みは Fukui のシステムでは存在しない。

この根本的視点の違いは、その帰結として他の様々な相違点を生み出すことになる。

3.3.1.2. 「一致」概念の相違

上述のように、Kuroda の「X一致」概念は語彙範疇・機能範疇の違いに関わりなく（そもそも、Kuroda は機能範疇という概念を想定していない）、主辞とその主辞が統率している投射内の要素（内的補部、外的補部）すべてに成立する関係である（Kuroda の Assumption U-4、上の (9)、(10) を参照）。したがって、主辞が I の場合にその指定部（外的補部）との間に成り立つ X一致（主格付与）、主辞が C の場合にその指定部（外的補部）との間に成立する X一致（WH 移動）、などの他に、主辞が V の場合にその補部（内的補部）との間に成り立つ X一致（対格付与）なども存在する。

Fukui の「一致」の概念は、標準的な意味での「指定部－主辞一致」であり、主辞と補部の間には成り立たない。さらに、機能主辞のみがそのような一致素性を持ち得るという想定（機能範疇のみが計算的側面を受け持つという仮説からの帰結）により、語彙範疇においてはこの意味での一致は起こらず、一致に関わる意味での指定部も存在しない（ここでの「指定部」の特徴付けは標準的なものではなく、機能範疇に関する Fukui の仮説から出てくる帰結である）。

要するに、Kuroda の X一致の概念のほうが Fukui の（標準的な）一致の概念よりも広い概念なのである。

3.3.1.3. 提案されたパラメータの本質

X一致自体の成立形態は普遍的である（U-4、(9) を参照）。したがって、日本語を含むどの言語にも X一致は存在する。そして、この普遍的 X一致が「強制されるか否か」がパラメータ化されているというのが Kuroda の主張である（上述 (12)）。英語は強制言語であり（(13)）、日本語は非強制言語である（(14)）。

この「強制化パラメータ」の本質が何なのかはいささか不明瞭である。そもそも「強制する」という概念が統辞理論の中でどのような位置を占めるのかは明らかとは言えない。かつてのように規則そのものに「義務的・随意的」の特性を帰着させることなく、全ての関係（素性照合、演算の適用、等）は随意的であり、結果として生じる出力表示が UG の諸条件を満たすかどうかでその派生が適合的かどうかを判断するというのが現在の一般的考えである。そうであれば、X一致という形式的関係そのものが強制されるのか（義務的か）、あるいは強制されないのか（随意的か）を指定すること自体が一般的考えとは相容れないし、ましてや「強制性」（義務性）がパラメータ化されているというアイデアは、文字通り解釈するならばいささか無理がある。（学習可能性に関しては、いくつかの方策が可能だとしても。）

さらに、強制化パラメータがおそらく引き起こすことになる理論の「非決定性」(indeterminacy)も問題になってくるかもしれない。

このように、Kurodaの強制性パラメータの本質に関してはいくつか不明瞭な点があり、このパラメータがUGのどの部分に関わるものなのかについても不明なのであるが、何らかの意味での「大域的パラメータ」をKurodaが構想していた可能性はあるように思う。

一方で、Fukuiのパラメータ設定((15))は明確に「語彙」に関するパラメータである。しかも、機能範疇という概念を導入することにより、語彙全般ではなく、語彙の中でも中核的な部分(述語・項構造を担う部分)を除いた、ある意味、周辺的な部分(機能範疇の領域)に限定されて言語間変異が存在することを主張している。Fukuiの趣旨は、UGに関わる改訂(機能範疇の提案、DP分析、構造構築に関わる提案、等)を行なうことにより、日本語と英語の間に存在する多くの統辞的相違に対して、「極めて限定的な語彙的パラメータ」を提案することにあつた。「語彙的パラメータ化」(lexical parametrization)そのものは、Borer(1984)、Manzini and Wexler(1987)などによってすでに示唆されていた考えであるが、Fukuiは、「機能範疇」という新たな範疇類を規定することにより、語彙的パラメータ化をさらに限定した「機能範疇パラメータ化仮説」(functional parametrization hypothesis)を提出した。

この仮説はそもそも理論の中に「機能範疇」という範疇類が規定されていなければ不可能な仮説であり、仮説が理論駆動的(theory-driven)であること、つまり、理論的改新が仮説の洗練化・再定式化を可能にすることを示す1つの例であると言えよう。

(16) 左右順序関係を除く言語間変異は語彙の機能要素の特性に帰着する。

(Fukui 1988, 1995等を参照)

そして、この仮説のいわば具体例として日英語比較統辞法モデルを提示したのである。(16)で左右順序関係を機能範疇パラメータ化から除外してあるのは、主辞パラメータの存在およびそれが移動に関わる一般的制約に対してもつ効果を考慮したからである。統辞法において左右順序関係が果たす役割については、1990年代から2000年代にかけて大きな理論的論争点になる。この点に関しては論じるべき点が多々あるが、それらについてはFukui(1995, 2001)などを参照されたい。

3.3.2. 類似点

このようにFukuiとKurodaの提案の間にはいくつか根本的な相違点が明らかに存在するが、基本的な面における類似点もまた存在する。

両者ともに、Iによる主格付与(主語牽引)とCによるWH牽引(WH移動)を結びつけ、統一的に扱おうとしたところから出発点がある。この統一化のためには、D構造における主語の位置に関して新たな提案を行なう必要があつたが、Kuroda

は既存の X バー式型を「完成」させることにより、Fukui は「述語・項構造は語彙範疇の投射内で行なわれる」という仮説の帰結として、ほぼ同一の仮説 (VP・述語内主語仮説) に到達した (Fukui はさらに DP 分析を通して名詞表現にも並行的な分析を適用した)。

こうして得た Max(I) と Max(C) の並行性 (Fukui の場合は Max(D) も) を利用して、適切なパラメータを提案することにより、Kuroda は義務的 WH 移動の存在、多重主格・目的格、かき混ぜ、虚辞の存在、多重話題化などに関わる日英語の違いを、Fukui の場合は WH 移動の存在、多重主格・多重属格、かき混ぜ、談話性 (discourse-orientation)、代名詞の存在、空所なしの話題化・関係節化、などを演繹的に導きだそうとしたのである (注 10 も参照)。これらの現象の導出の仕方には各々のシステムの特異性があり、2つのシステムの予測も異なることが多々あるが、出発点における発想が似通っていることは確かである。

特に、主格 (あるいは格一般) の付与の仕方に日英語の相違の説明の起点を置く発想は、確かに Fukui と Kuroda に共通の認識であるが、それを「Fukui と Kuroda は日本語に ϕ 素性一致が (あるいは ϕ 素性が) ないと主張した」(引用例は数多くあるが、最近の例としては Roberts 2019: 324 などを参照) という言い方でまとめるのは、今までの議論で明白だと思われるが、明らかにミスリーディングである。Kuroda が注目したのは「主格付与」(および日本語における lower-case case-marking の存在) であり、いわゆる一致 (agreement)、あるいは ϕ 素性一致ではない。X 一致が ϕ 素性一致とどのような関係にあるかは上述のように不明であるとしているし (3.1.3. 参照)、そもそも X 一致が「日本語に存在しない」とは Kuroda は主張していない。Fukui は (これも上述のように) 標準的な指定部-主辞一致を想定しているので (かつ、主格の標示が ϕ 素性一当時の枠組みでは Agr- を通して行なわれると仮定しているので)、確かに「日本語には活動的な I が存在しない」という命題は「日本語には ϕ 素性が存在しない」とする命題として解釈することが可能であるし、また実際、いくつかの論考ではそういう述べ方をしていることもある (筆者による上掲の論文を参照)。

ただ、ここで強調しておきたいのは、Fukui にしろ Kuroda にしろ、比較統辞論の最大のポイントは「クラスター効果」として現れてくるパターンの把握であって、個々の要素 (例えば ϕ 素性) の特性を述べて、その結果、その要素に関わる範疇 (例えば Max(I)) が示す特徴だけを説明できたとしても、システム全体の研究としては不十分であり、理論的魅力もそれほど大きなものではないという認識もっていることである。だからこそ、主格付与に関して起こっていることと WH 移動に関して起こっていること (Fukui の場合は、さらに属格付与) を結びつけるという最初の発想が重要だったのである。 ϕ 素性の特性を見て Max(I) の指定部付近で起こっていることのみを説明するのであれば、例えば空主語パラメータなどでもすでに行なわれていたことであり、(それ自体、意味のないことでは決してないが) 理論的インパクトはシステム全体をカバーする提案に比べるとあまり強くないと思

う。Fukui と Kuroda のシステムの特徴は、あくまでも、1つのパラメータによって全ての（あるいは多くの）範疇における並行的な現象を自動的に捉えられるという点にあり、 ϕ 素性の欠如を主張した研究としてのみこれらに言及するのは、(Kuroda の場合は事実と異なる上に) 少なからず研究の矮小化につながるように思う。

3.4. Fukui と Kuroda の提案の相違点と類似点：まとめ

以上の議論に基づいて Kuroda のシステムと Fukui のシステムの相違点をまとめると以下のようになる。

(17) Kuroda と Fukui の提案の相違点

Kuroda:

幾何学的・表示論的、Xバー式型による「普遍空間」の規定、構造的枠組みは全ての言語に共通、X一致（拡大された一致概念：主辞とその投射内要素との関係）は普遍的、X一致の「強制」をパラメータ化

Fukui:

派生論的、ボトムアップの構造構築、Xバー式型を廃棄、移動と構造構築操作の統一（Adjunction, 後に改訂され Merge）、構造構築の「開放性」に注目、一致（Spec-head agreement）の有無を機能要素の特性に基づいて「パラメータ化」

しばしば引用の対象とされる「日本語における ϕ 素性の欠如」については、Kuroda には上述の簡単なコメント以外にはそもそも言及がないし、Fukui は確かに機能主辞 I による主格付与に関して ϕ 素性（一致要素）の日本語における欠如に言及しているが、それはあくまでも「日本語における活動的機能主辞の欠如」の一例として挙げているのであって、 ϕ 素性の欠如そのものを突出した形で強調しているわけではない。焦点は、あくまでも指定部-主辞一致（Kase）の横断的欠如のほうにある。

一方で、Kuroda と Fukui の提案には明らかな類似点もある。それらは、概略、次の2点にまとめられると思う。

(18) Kuroda と Fukui の提案の類似点

- (i) 形式的な「一致」関係に2つのシステムの様々な相違点を帰着させる発想。ただし、X一致（X-Agreement） \neq 「指定部・主辞一致」（Spec-head agreement）。
- (ii) 一群の主辞がシステムの中で「横に」連動し、パターンを生じさせる。その結果、クラスター効果が発生する。

本稿で何度も強調してきたように、Kuroda が想定している X 一致は、Fukui が仮定している標準的な指定部-主辞一致とは異なる概念である。しかしながら、主辞とその投射内の要素の間に一定の形式的関係を認め、その形式的関係を用いて日英語の統辞的差異を導出しようとする発想は両提案の明らかな類似点と言える。

しかしながら、それよりも重要な類似点は、(ii) のクラスター効果の導出である。明らかに、Kuroda も Fukui もこの点に自らの提案の理論的魅力を見いだしているし、また、これらの提案の後に続く 30 年以上にわたる生成文法的比較統辞論の研究も、クラスター効果の導出をその中心的課題のひとつとして展開してきたと言える。この問題については、次節で簡単に論じる。

4. Fukui/Kuroda 以降の比較統辞論の発展とパラメータの概念

日英語比較統辞論に関する Fukui と Kuroda の提案がなされてから現在に到るまで、生成文法における言語の多様性（パラメータ）研究は、莫大な量にのぼっている。それらを概観することは、紙幅の関係からここでは不可能である。数多く出版されているハンドブックの類いや、Eguren et al. (2016), Roberts (2019) などを参照されたい。あえて非常におおざっぱに言ってしまうと、1990 年代以降のパラメータ研究は、次に挙げる 3 つの問題領域を巡って展開してきたと言えるのではないかと思う。

(19) Fukui/Kuroda 以後の多様性研究

- (i) 基本的に「機能範疇パラメータ化仮説」に基づく、様々な言語の比較に関する膨大な量の経験的・記述的研究。
- (ii) そもそも「なぜ」言語に多様性が存在するのかという根本問題についての考察。多様性と「言語本体」との関係についての考察。
- (iii) パターンの発生、クラスター効果をどう扱うかについての考察。

量的に言えば (19i) に属する研究が圧倒的多数だろう。印欧諸語を主な対象にした初期の比較研究に加えて、日本語や中国語を中心としてアジアの諸言語の比較統辞論研究も多く行なわれるようになったし、Ken Hale によって始められた「生成類型論」(generative typology) と呼ぶべき研究（フィールドワークを伴う、様々なタイプの言語に関する生成文法的比較研究）も Mark Baker や Norvin Richards 等を中心にして盛んに行なわれている。むしろ、原理・パラメータの枠組みにおける言語獲得や言語変化の経験的研究も多数なされてきた。これらの研究によって蓄積された莫大な記述的データは、次の理論的展開において必ず大きな役割を果たすと予想される。ただ、記述対象が爆発的に広がった一種の副作用として、「記述の圧力」による新たな機能範疇の無制限な氾濫が発生し、結果として理論の説明力の減退を招いた側面もあった。この点に関しては、Fukui (1995) や Fukui and Sakai (2003) などで論じたので、詳細はこれらの文献を参照されたい (Chomsky 1995 も参照)。

(19ii) に挙げられた理論的問題に関しては、Chomsky が行なった示唆がもっとも興味深いものだと思う。そもそも「なぜ」人間言語に多様性が存在するのかという根本問題は、2 つの面から考察できる。1 つは、いわゆる「Saussure 的恣意性」(Saussurean arbitrariness) である。これは言語の語彙項目(「語」)が「指示」する対象・概念とその語彙項目がもつ「音声」との間に必然的な関係が存在しないという事実

であるが、このことには、言語が人間の「自由な思考」を許すために、外界を「記号化」する必要があったという意味で、いわば一種の必然性が認められる。人間の思考が外界によって拘束されないために、言語記号とその指示対象との間には直接的関係が存在しない必要があったと言える。

では、システムに関わる多様性はなぜ存在するのか。この問題は、Baker (2001) によっても考察されているが、現時点で一番興味深いと思われる提案は、UG が要求する遺伝情報と経験による「学習」負荷の間に一種の Mini-Max 問題が生じ、この問題に対する最適解が UG の不完全指定 (underspecification)、ひいてはパラメータの存在を要求する、という Chomsky の示唆であろう (チョムスキー 2003: 309, Chomsky 2009: 385–386, 等を参照)。この示唆をさらに発展させるような研究はその後、出現していないと思われるが、今後、ゲーム理論などを用いたアプローチが期待される領域であると思う。

「言語本体」と多様性との関係については、過去 10 年間ほど、Chomsky は「言語本体」—すなわち、語彙を入力としてとり、それに計算を加えることによって概念・思考システムに無数の言語表現 (構造) を出力として送り込む言語システム—そのものは、真に普遍的であり、「多様性・言語間変異」が生じるのは、生成された言語表現を感覚・運動システム (音声・サイン) が取り扱える形に写像する「外在化」(externalization) の過程においてである、という主張を繰り返している。Chomsky (2021a) においても、以下のように述べている。

- (20) The variety of languages might be localized in peripheral aspects of lexicon and in externalization; perhaps completely, we might someday learn.

(Chomsky 2021a: 11–12; 強調は引用者)

ここで Chomsky が peripheral aspects of lexicon と述べているのは、基本的に語彙の「機能範疇 (の形式素性) が関わる部分」のことである。そして、語彙の限定された部分での変異以外の言語間変異は、おそらく全て外在化において起こっているであろうというのが彼の予想である。

ちなみに、上で Chomsky が述べていることを、Fukui (1988) が述べている次のような主張と比べてみると、

- (21) Restrictions on (i) parameters and (ii) lexicon:

(i) Linear order

(ii) The existence and the ‘contents’ (features) of functional categories

(Adapted from Fukui 1988: 268)

基本的な構図は 1980 年代後半と現在でそれほど変わっていないことが判る。(21ii) で Fukui が言っていることは、(20) で Chomsky が peripheral aspects of lexicon と言っていることとそれほど変わらないし、外在化の主な (もちろん全てではない) 内実は左右 (線型) 順序関係の決定であるから、こちらも (21i) で Fukui が言っ

いることと基本的に同じである。ここで Fukui が主張していることは「パラメータは左右（線型）順序関係に関わる要因に限定される」ということであって（Fukui 1988: 267 ではもっと明確に “Parameters are restricted to those having to do with linear order” と述べている）、一般的結論として左右（線型）順序関係の規定が外在化の過程に限定されるのであれば、当然、パラメータも外在化に関わるものに限定されることになる。したがって、Fukui (1988) が「言語本体」においてパラメータとして機能しているとした「左右（線型）順序関係」の決定が、Chomsky (2021a) においては「言語本体」の（半分）外に出され、外在化過程の問題として再定式化されているという相違点はあるにせよ、基本的な主張の内実はほぼ同一であることが判る。なお、「言語本体」における（おそらく機能要素の特性の帰結としての）パラメータの存在も Chomsky は認めているようであるが、この点に関しての彼の立場は不明瞭である。

最後に (19iii) の問題（パターンの発生・クラスター効果の出現）であるが、これこそまさに Fukui と Kuroda が捉えようとした現象であった。そして、その後の比較統辞論研究でもクラスター効果をどのように捉えるかは大きな理論的課題となる。

語彙パラメータ化の考えは、いずれにしろ必要となる語彙獲得に言語獲得（I 言語の発生）を還元するという意味で、いわば「無駄がない」考えなのであるが、反面、語彙の獲得がそれ自体で完結してしまい、文法・統辞法システム全体への波及がなければ、理論的にはそれほど魅力がある仮説とは言えない。これは、語彙パラメータ化の限定版である機能範疇パラメータ仮説でも同様である。ちなみに機能範疇ではなく、語彙要素・語彙範疇の獲得一生得概念と音声素性の結合・ラベリングにシステム全体の特性を還元できれば、Saussure 的恣意性に**個別言語の特性全て**を帰着させることになり、いわば究極の語彙パラメータ化となって理論的意義は大きい（上述の (4i) を参照）、様々な難点があり、現時点で検討可能な仮説とまでは言えないと思う。この問題については、福井 (2013) を参照されたい。一般論として言えば、局所的データがシステム全体に波及してパターンが生じ、クラスター効果が得られて初めて理論的に興味深い結果が得られたと言える。このことは、Fukui も Kuroda もはっきりと意識していた。

しかしながら、主辞の（Fukui の場合で言うと機能主辞の）特性がなぜ「横に」一般化されてシステム全体に影響を与えるのかについての原理付けられた説明は、Fukui も Kuroda も与えることが出来なかった。その後、Baker (2001) は「多総合性パラメータ」(polysynthesis parameter) を頂点とする様々なパラメータの階層を提案し、その結果としてクラスター効果の一部を説明することを試みた。これは画期的な試みであったが、どのようなパラメータが原理的に可能なのかという問いにはやはり答えられなかったし、個々のパラメータの理論的設定根拠や、提案している「パラメータ階層」の成立根拠を十分に説明するまでには到らなかった。

Newmeyer (2005) や Boeckx (2011) は、様々な理由を挙げて「パラメータ廃止

論」を展開している。極小主義の進展によってUG内部の原理の数が極小化され、もはや当初の「パラメータ化された諸原理」という考えは意味をなさなくなっていること¹¹。語彙パラメータ化は説明力が乏しく(上述の議論も参照)、単に現象を記述しているのに過ぎないこと。パラメータを用いた一般化には例外が多く、UGにパラメータを組み入れる方向性には強い疑問が生じること。こういったところが主な理由である。パラメータ概念を否定することにより、NewmeyerもBoeckxも、個別I言語は1次言語データに基づいて「学習」されるという、原理・パラメータモデル以前の生成文法の考え方と同種の主張をしている。さらに、Boeckxは、クラスター効果は「言語に特有ではない」一般的認知機構がもつ特性によって得られる結果であると主張する。

こういったパラメータ否定論に対して、Ian Robertsは、原理・パラメータ理論以前の古典的(標準理論的)言語獲得観への回帰であるとして反論を加えている(Roberts 2019等を参照)。類型論的に様々な特徴をもつ数多くの言語に関する分析を詳細に検討した上で、Robertsは原理・パラメータの枠組みを擁護し、それは現行の極小主義モデルと問題なく共存できると主張する。長年にわたる理論的・経験的研究に基づくRobertsの提案を簡潔にまとめることは困難であるが、ごく簡単に説明すると以下のとおりである。

まず、Robertsはパラメータ的特性の元は各々の機能主辞、中でもその形式素性に存すると仮定する。これは、上述の機能範疇パラメータ化仮説をChomsky(1995)が形式素性の概念を用いて洗練化したものである。その上で、各機能主辞の特性が全ての(あるいは多くの)機能主辞に「一般化」される原理が存在し、それによってパターン化、クラスター効果が生じると提案する。この原理をRobertsは「素性の経済性」(Feature Economy)と「入力的一般化」(Input Generalization)と呼び、これらは言語固有の原理ではなく、いわゆる「第3要因」(third factor)であると主張している(ちなみに、Biberauer 2018はこの2つの経済性を「最少手段の最大化」(Maximize Minimal Means)という単一の最適化方略として再定式化している)。UGが不完全指定している形式素性にこれらの原理が働き、その結果、個別I言語の特性と統辞特性のクラスター効果が生じるとするのである。

なお、Robertsによると、これらの「経済性原理」は「ソフト」なものであり、これらがクラスター効果を生むべく動作するのはあくまで傾向であって、そこに(NewmeyerやBoeckxが懸念する)例外が生まれる余地が生じることになる。こう考えると、いわゆる「パラメータ」という概念は、UGが直接包含するものではなくて、UGが不完全指定した形式素性に対して、(1次言語データに基づいて)上述の「第3要因」(素性の経済性と入力的一般化)が働くことによって「創発」(emerge)

¹¹ Bakerの多総合性パラメータは θ 理論に関わるパラメータであり、 θ 理論は現行の極小主義的理論においても「言語固有条件」(Language Specific Conditions, LSCs)の1つとして維持されている(Chomsky 2021aを参照)。したがって、多総合性パラメータは、極小主義理論においてもその存在が理論的に許容される少数のパラメータ候補の1つであると言える。

するものであると Roberts は主張する。これが、Roberts が提案する「極小主義における原理・パラメータの枠組み」である。Roberts は、この考えに基づいて数々の極めて興味深い類型論的一般化の「説明」を提示している。

以上が Fukui と Kuroda の提案以降の比較統辞論の発展に関する（焦点を絞った）極めておどろばな概観である。初期のパラメータ概念がもっていた「統辞的特徴のパターン・クラスター効果」の説明という存在意義は、Fukui/Kuroda の試みに共通する中心的課題であったが、現行の生成文法の流れとしては、Kuroda のような統辞法内部の演繹的導出ではなく、Fukui が提示した機能主辞の特性の日英語における「横並びの一般化」は、UG が不完全指定した部分（機能要素の形式素性）に対する一般的認知機構 (Boeckx) あるいは第3要因 (Roberts) が1次言語データに基づいて相互作用した結果として解釈される方向にあるようである。

これからの発展の詳細を予測するのは困難であるが、Boeckx 等の提案と Roberts の提案が真に異なる提案であるのかは、慎重に考えなくては行けない問題だと思う。どちらも UG が内包する概念としてのパラメータを（不完全指定以外は）否定して、「パラメータ効果」を「言語の外側」に求めている点では同一であるが、Roberts はパラメータ効果を生み出すものを第3要因であると解釈している。しかし、ここで用いられている第3要因の概念が、UG の中核的デザインを決定する要因としての（通常の意味での）第3要因と果たして同一視してよいものなのかどうかは、注意深く検討しなくてはならないだろう。Chomsky が主張する第3要因とは、言語固有ではない、一種の「自然法則」と解釈され、それによって人間に言語機能 (UG) が発生したときにその特性が決定されたと考えるのである。この意味での第3要因によって決定された UG の特性には、基本的に例外は存在しない。それに対して、Roberts たちが提案する「第3要因」は「ソフト」な適用を許し、その結果、懸念される例外事象も扱えるという。しかしそれならば、Boeckx が主張する一般的認知機構といったどこが違うのであろうか。そもそも、言語多様性を扱う領域において、UG の中核を規定している第3要因の関与を（比喩的にではなく）求めることに正当性はあるのだろうか。

関連する点として、学習不可能性を示す強力な論拠としての「刺激の貧困」は、UG の中核を成す（たとえば、「構造依存性」(structure-dependence) のような）特性に関して提出されているものであり（しかもこれらには例外がない）、言語の多様性の根源であるとされる外在化過程については（筆者が知る限り）提出されていない。現行の非常に制限的な UG を仮定すれば、外在化過程の学習可能性を否定する強力な論拠は乏しいのではないだろうか。そう考えると、Boeckx の（かなり荒っぽい）主張も全く成立しないとも言えず、同時に、Roberts の主張と Boeckx の主張が真に異なる内容をもつものであるかは、今一度検討する余地があるように思われる。

5. おわりに

以上、本稿では生成文法における言語間変異（多様性）の研究が持つ意義についてまず考察し、生成文法においては言語間変異の問題はUG（言語獲得能力の普遍性）の問題と表裏一体の関係にあると指摘した。UGを仮定してその本質を探究しようとするからこそ、言語間変異の存在が単なる所与の事実としてではなく、説明を要する理論的問題として提起されるのである。

UG概念の基礎付けに集中していた初期の生成文法研究では、言語間変異に関しては「表面的な圧倒的多様性にもかかわらず、その範囲はUGによって厳しく制限されているはずだ」という原理的主張以外には、(いくつかの重要ではあるが断片的な提案を除いて) 実質的提案はほとんどなされていなかった。

言語間変異に関する実質的提案がなされたのは、1980年前後に成立した原理・パラメータの枠組みにおいてであるが、この枠組みの萌芽期にいくつか提出されたパラメータは、その本質に曖昧な点があったり、個別言語の特性の説明に不明な点があったり、説明対象に拡がりや欠いたりすることも多かった。また、対象言語は(構成性パラメータを除き) 主に印欧語圏の諸言語であった。

このような状況の中で提案された「複数の言語をシステム全体として比較考察する」という点に焦点を当てた日英語比較統辞論の嚆矢ともいえる Fukui (1986, et seq.) と Kuroda (1988) の研究に関しては、両者ともに「日本語には ϕ 素性が存在しないと主張した」という一点のみにおいて言及されることが多い。本稿では、この評価は誤解に基づいた極めてミスリーディングなものであることを論じた。

Fukui と Kuroda の提案の大きな特徴は、第3節で簡単に触れたように、単一の範囲内での事情が関連する範囲に一般化され、範囲間の並行性が得られることにより広範囲のクラスター効果が説明されるという点にある。Kuroda の場合は(語彙範囲を含む) 文字通り全ての範囲に拡張されるし、Fukui の場合は機能範囲(C, I, D) というクラス全般に拡張される。つまり、1回のパラメータ設定でシステム全体に波及する広汎な効果を導出するという点において、Xバー理論に付随する主辞パラメータにも似た通範囲性を持つと同時に、構成性パラメータと同様、数多くの統辞的特徴を(構成性パラメータとは異なり) 演繹的に導出することも可能であることを示そうとしたのである。ここにこそ Fukui/Kuroda の提案の骨子があるのであって、日本語における ϕ 素性の欠如という仮説は、統辞システム全体の動きを見るためのひとつの取っかかりに過ぎない(Kuroda の場合は、そもそもそのような主張をしていない) ¹²。

日英語比較統辞論に関するこれら2つの提案がなされてから現在に到るまで、生成文法における言語の多様性(パラメータ)研究は、莫大な量にのぼっている。そ

¹² Fukui/Kuroda 以降、日本語に ϕ 素性が存在する(あるいは、一致が存在する)という主張を行なう数多くの研究が発表されてきた。それらの主張の概観とその問題点については、Kobayashi (2022) を参照されたい。

れらを包括的に論じることは、紙幅の関係からここでは不可能であるが、いくつかの中心的課題に的を絞って、第4節で簡単に概説した。それらの課題のひとつとして、Fukui および Kuroda が説明しようとしたクラスター効果の類いの理論的説明を巡って、現在に到るまで「パラメータ」の概念が様々な角度から吟味されてきたことが判る。パラメータの本質については複数の立場からの論争が未だ進行中であるが、クラスター効果を生む根本原因がどこにあるかを追究することによって、言語理論における「パラメータ」概念の最終的位置付けも決まってくると思われる。

日英語比較統辞論に限って言えば、主辞パラメータにしろ、「指定部-主辞一致」あるいは「X一致」を巡るパラメータにしろ、きれいに全(機能)範疇に一般化される。だからこそ、主辞パラメータに対する日英語の対比が、ほとんど常に「パラメータの模範例」として、教科書やその他の文献において挙げられるのであるが、Fukui や Kuroda が着目したこういった日英語間の「きれいな対比」の本質はいったい何なのか。(「幻想」だとしたら、その幻想の原因は何か。)他のI言語において干渉作用をもつ要因が生じているところに、この2言語間では干渉が生じていないということなのだろうか。もしそうならば、それはなぜなのか。こういった根本問題が日英語比較統辞論においては未だ手つかずのままに残っているように思われる。過去の研究に対する正確な理解に基づいた、さらなる探究が望まれる。そうすることによって、一般言語理論におけるパラメータ概念のより深い理解に対する貢献が日英語比較統辞論研究を通してなされることを期待したい。

参考文献

- Abney, Steven (1987) *The English noun phrase in its sentential aspect*. Unpublished doctoral dissertation, MIT.
- Baker, Mark C (2001) *The atoms of language*. New York: Basic Books.
- Berwick, Robert C., Paul Pietroski, Beracah Yankama and Noam Chomsky (2011) The poverty of the stimulus revisited, *Cognitive Science* 35: 1207–1242.
- Biberauer, Theresa (2018) Pro-drop and emergent parameter hierarchies. In: Federica Cognola and Jan Casalicchio (eds.) *Null subjects in generative grammar: A synchronic and diachronic perspective*, 94–135. Oxford: Oxford University Press.
- Boeckx, Cedric (2011) Approaching parameters from below. In: Anna Maria Di Sciullo and Cedric Boeckx (eds.) *The biolinguistic enterprise: New perspectives on the evolution and nature of the human language faculty*, 205–221. Oxford: Oxford University Press.
- Borer, Hagit (1984) *Parametric syntax*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1951) Morphophonemics of Modern Hebrew. Unpublished master's thesis, University of Pennsylvania. [Revised version published by Garland, New York, 1979.]
- Chomsky, Noam (1955) *The logical structure of linguistic theory*. Ms., [Revised 1956 version published in part by Plenum, New York, 1975.]
- Chomsky, Noam (1957) *Syntactic structures*. The Hague: Mouton.
- Chomsky, Noam (1959) A review of B. F. Skinner's *Verbal Behavior*. *Language* 35: 26–58.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (1976) Conditions on rules of grammar. *Linguistic Analysis* 2: 303–351. [Reprinted in Chomsky (1977), 163–210.]
- Chomsky, Noam (1977) *Essays on form and interpretation*. New York: North-Holland.
- Chomsky, Noam (1980) *Rules and representation*. New York: Columbia University Press.

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1982) *Some concepts and consequences of the theory of government and binding*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (1986a) *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (1986b) *Knowledge of language: Its nature, origin, and use*. New York: Praeger.
- Chomsky, Noam (1988) Transformational grammar: past, present and future. In *Generative grammar: Its basis, development and prospects*. Studies in English Linguistics and Literature (Kyoto University of Foreign Studies), Special Issue. [論文の邦訳は「変換文法—過去, 現在, そして未来」としてノーム・チョムスキー (著) 福井直樹 (編訳) 『チョムスキー言語基礎論集』, 東京: 岩波書店, 2012. に収録。]
- Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- チョムスキー, ノーム (2003) 福井直樹・辻子美保子 (訳) 『生成文法の企て』東京: 岩波書店.
- Chomsky, Noam (2009) Conclusion. In: Massimo Piattelli-Palmarini, Juan Uriagereka, and Pello Slaburu (eds.) *Of minds & language: A dialogue with Noam Chomsky in the Basque Country*, 379–409. New York: Oxford University Press.
- Chomsky, Noam (2021a) Minimalism: Where are we now, and where can we hope to go. *Gengo Kenkyu* 160: 1–41.
- Chomsky, Noam (2021b) Simplicity and the form of grammars. *Journal of Language Modeling* 9: 5–15.
- Eguren, Luis, Olga Fernández-Soriano, and Amaya Mendikoetxea (eds.) (2016) *Rethinking parameters*. Oxford: Oxford University Press.
- Fukui, Naoki (1986) A theory of category projection and its applications. Unpublished doctoral dissertation, MIT. [Revised version published as *Theory of projection in syntax*. Stanford, Calif.: CSLI Publications, 1995.]
- Fukui, Naoki (1988) Deriving the differences between English and Japanese: A case study in parametric syntax. *English Linguistics* 5: 249–270.
- 福井直樹 (1989) 「句構造の理論と比較統語論①～④」『月刊言語』18(7): 94–102, 18(8): 90–95, 18(9): 96–100, 18(10): 94–99.
- Fukui, Naoki (1995) The principles-and-parameters approach: A comparative syntax of English and Japanese. In: Masayoshi Shibatani and Theodora Bynon (eds.) *Approaches to language typology*, 327–372. Oxford: Oxford University Press. [Reprinted in Fukui (2006), 100–131.]
- Fukui, Naoki (2001) Phrase structure. In: Mark Baltin and Chris Collins (eds.) *The handbook of contemporary syntactic theory*, 374–406. Oxford: Blackwell. [Reprinted in Fukui (2006), 258–288.]
- Fukui, Naoki (2006) *Theoretical comparative syntax: Studies in macroparameters*. London: Routledge.
- Fukui, Naoki (2011) Merge and bare phrase structure. In: Cedric Boeckx (ed.) *The Oxford handbook of linguistic minimalism*, 73–95. Oxford: Oxford University Press. [Reprinted in Fukui, Naoki (2017) *Merge in the Mind-Brain*, 9–34. London: Routledge.]
- 福井直樹 (2013) 「生成文法と人間言語の「多様性」」『日本エドワード・サピア協会研究年報』27: 1–23.
- Fukui, Naoki and Hiromu Sakai (2003) The visibility guideline for functional categories: Verb-raising in Japanese and related issues. *Lingua* 113: 321–375. [Reprinted in Fukui (2006), 289–336.]
- Fukui, Naoki and Margaret Speas (1986) Specifiers and projection. *MIT working papers in linguistics* 8, *Papers in theoretical linguistics*: 128–172. [Reprinted in Fukui (2006), 9–37.]
- Gleitman, Lyla R. (Jeffrey Lidz ed.) (2020) *Sentence first, arguments afterward: Essays in language and learning*. Oxford: Oxford University Press.
- Goodman, Nelson (1943) On the simplicity of ideas. *The Journal of Symbolic Logic* 8: 107–121.
- Greenberg, Joseph H. (1963) Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In: Joseph H. Greenberg (ed.) *Universals of Language*, 58–90. Cambridge, MA: MIT Press.
- Hale, Kenneth (1980a) Remarks on Japanese phrase structure: comments on the papers on Japanese syntax. *MIT working papers in linguistics* 21: 185–203.
- Hale, Kenneth (1980b) The position of Warlbiri in a typology of the base. Bloomington, IN: Indiana University Linguistics Club.

- Hale, Kenneth (1982) Preliminary remarks on configurationality. In: James Pustejovsky and Peter Sells (eds.) *Proceedings of NELS 12*, 86–96. Amherst, MA: GLSA Publications.
- Hale, Kenneth (1983) Warlpiri and the grammar of non-configurational languages. *Natural Language and Linguistic Theory* 1: 5–47.
- Harris, Zellig (1951) *Methods in structural linguistics*. Chicago: University of Chicago Press.
- 服部四郎 (1972) 「言語と言語学と普遍性」『月刊言語』1: 2–3.
- Hoji, Hajime (1985) Logical form constraints and configurational structures in Japanese. Unpublished doctoral dissertation, University of Washington.
- Huang, C.-T. James (1982) Logical relations in Chinese and the theory of grammar. Unpublished doctoral dissertation, MIT.
- Joos, Martin (1957) Editorial comments. In: Martin Joos (ed.) *Readings in Linguistics*, 96. Washington: American Council of Learned Societies.
- 柄谷行人 (2020) 『柄谷行人発言集：対話篇』東京：読書人。
- Kobayashi, Ryoichiro (2022) Functional parametrization hypothesis in the minimalist program. Unpublished doctoral dissertation, Sophia University.
- Koopman, Hilda and Dominique Sportiche (1991) The position of subjects. *Lingua* 85: 211–258.
- Kuroda, S.-Y. (1987–1988) Where’s Chomsky’s bottleneck?, A geometric conception of grammar, Harris and the reality of language. Three-part article. *Center for Research in Language (CRL) Newsletter* (University of California, San Diego) 1(7): 5–11, 2(5): 4–10, 3(1): 4–12.
- Kuroda, S.-Y. (1988) Whether we Agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. In: William J. Poser (ed.) *Papers from the second international workshop on Japanese syntax*, 103–143. Stanford, Calif.: CSLI Publications. [Reprinted in Kuroda, S.-Y. *Japanese syntax and semantics: Collected papers*, 315–357. Dordrecht: Kluwer, 1992.]
- Manzini, Maria Rita and Kenneth Wexler (1987) Parameters, binding theory, and learnability. *Linguistic Inquiry* 18: 413–444.
- Mendivil-Giró, José-Luis. (2018) Is universal grammar ready for retirement? A short review of a longstanding misinterpretation. *Journal of Linguistics* 54: 859–888.
- Nakamura, Issu (2020) Labeling and (im)perfect lexical items. Unpublished bachelor’s thesis. University of Tokyo.
- Newmeyer, Frederick J. (2005) Against a parameter-setting approach to typological variation. *Linguistic variation yearbook* 4: 181–234.
- Postal, Paul (1966) On so-called pronouns in English. In Francis P. Dinneen, S. J. (ed.) *Report of the seventeenth annual round table meeting on linguistics and language studies*, 177–206. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Rizzi, Luigi (1982) *Issues in Italian Syntax*. Dordrecht: Foris.
- Rizzi, Luigi (1986) Null objects in Italian and the theory of *pro*. *Linguistic Inquiry* 17: 501–557.
- Roberts, Ian (2019) *Parameter hierarchies and universal grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Saito, Mamoru (1985) Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications. Unpublished doctoral dissertation, MIT.
- Taraldsen, Tarald (1978) On the NIC, vacuous application, and the *that*-trace filter. Ms., MIT.

執筆者連絡先：

上智大学大学院言語科学研究科

e-mail: n-fukui@sophia.ac.jp

[受領日 2021年11月22日

最終原稿受理日 2021年12月7日]

Abstract**English-Japanese Comparative Syntax and the Theory of Parameters:
On Certain Differences and Similarities between the Fukui and Kuroda Systems**

NAOKI FUKUI
Sophia University

In this article, I first point out that Generative Grammar addresses the problem of “explaining” the diversity of human languages, by, somewhat ironically, proposing the concept of UG (Universal Grammar), a common cognitive capacity of homo sapiens. Theoretical explanations require a minimum set of theoretical postulates, and from them, try to derive (in the best cases, deductively) as many empirical phenomena as possible. I argue that the two early attempts at the comparative syntax of English and Japanese – Fukui (1986, et seqq.) and Kuroda (1988) – actually tried to propose theoretical explanations in this sense, rather than simply claiming, as widely – and mistakenly – assumed in the literature, that certain features (ϕ -features) are absent in Japanese. These authors tried to show that there are certain important “clustering effects” that ought to be derived from a single parameter, if the theory of UG is properly modified. I argue that the proper status of these two approaches vis-à-vis a huge amount of comparative work that followed them in the generative framework can be appropriately established under this interpretation. I also suggest that recent attempts at deriving clustering effects in various ways can in fact be shown to be rooted in earlier approaches in the 1980s, including the two proposals just mentioned. Exploration into the nature of “clustering effects/patterns” observed in the work of Fukui/Kuroda are likely to unveil the very nature of the “parameter” concept in general linguistic theory.